

2011年 2月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 28



## 紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 20

(聞き手 高橋素子)

高橋 >

毎日、厳しい寒さですね。

去年のあの夏の酷暑が嘘の様！

去年は七月に、百年に一度と言われる集中豪雨で、子規ゆかりの「愚陀佛庵」が倒壊しました。今年は、どうか素晴らしい年になるよう、祈らずにはられませんね。

会長 >

確かに今年は、厳しい寒さです。石鎚山系のブナ林が壊滅的被害を受けています。

愚陀佛庵が倒壊したのも自然の悪戯です。良い年になって欲しいというより、しなければなりませんね。

私は、今年も滑稽句をたくさん作りたいと思っています。また、後世に滑稽句を残すという意味でも、滑稽句を探しています。ですから、眼が充血し、滑稽句に耳を長く伸ばしています。やはり兎歳ですね。

高橋 >

まあ！初っ端から面白いご挨拶ですね。それでは本日の本題に参ります。前回に続いて「夏の部の人事」から、御指導よろしくお願ひ致します。

季語は「麦秋」です。麦は初夏に実り取入れの時を迎えますが、秋に稔る稲にならって、麦秋と言うのですね。所謂「麦の秋」です。会長も句集「逃水」に山頭火の如く自由律でお詠みですね。

**見渡すかぎり麦秋 健**

では、百九年前の滑稽句、ご解説下さいね。

麦秋や馬に出て行く馬鹿息子 太祇

麦秋や聳殿ことしはじめじやの 召波

麦秋や壮士村に入る仕込杖 子規

会長 > 「麦秋や馬に…」、

馬と馬鹿をかけたものと思われませんが、「馬に出て行く」は、表通りを馬が通るのを家から飛び出して見るという意味です。

「麦秋や聳殿…」、

聳殿が野良仕事をしない。嫌いなんです。麦秋の頃になってやっと外に出てきたのです。

「麦秋や壮士…」、

仕込杖は杖の中に刀を忍ばせるものですが、壮士は仕込杖を持ち歩いたものです。正岡子規も仕込杖を持ち歩いたんですよ。

高橋 > へえー！子規が仕込杖ですか！

それにしても、いつの世にも馬鹿息子や怠け者の聳殿がいて、親の苦労は絶えないのですね。馬と馬鹿をかけていたとは、そこまでは気付きませんでした(笑)。

次の季語は「鮓」です。地方によって独特のお鮓がありますが、近江の、蕪村の有名な鮓鮓の句、

鮓鮓や彦根の城に雲かかる 蕪村

「滑稽俳句集」に挙げられている句も蕪村。どうも蕪村はお鮓がお好きだったようですね(笑)。

鮓桶をこれへと樹下に床几かな 蕪村

会長 > 鮓は、「寿司」のことですね。

生魚は腐敗を防ぐ樽に酢で処理をする。寿司は夏の季語になっていますね。

蕪村の一句目は、「とりあわせ」ですが、おそらくは、城にかかった雲が鮓鮓に似ていたんで

しょうね。琵琶湖の珍味ですから、お殿様のような方は大好物に違いない。

二句目は、野外の風景で樹下に床几を置いて食べるわけですね。どこが面白いかといえ  
ば、しもじもの者は容易には殿様に面会できぬが、鮓桶はすぐに面会できて、しかも床几を  
置いてある。殿様も食べ物には弱いということです。

高橋 > 次の季語は「井戸替」です。水をすっかり汲み上げての井戸底のお掃除のことですね。

井戸替に陣笠着たる男かな 無聲

会長 > お侍ともなれば庶民の井戸替えなど滅多にやらないが、大事だったんですね。井戸替に陣  
笠が登場する可笑しさです。

高橋 > 次の季語は「川狩」です。川で魚を取ること。特に夏に川で魚を大量にとることを言うよう  
ですね。

川狩や地蔵の膝の小脇差 一茶

川狩や夜討に似たる人のなり 虚子

川狩やふんどしの旗ひるがへし 紅緑

会長 > 「川狩や地蔵の…」、

小脇差を地蔵の膝に置いて川狩をするという風景。小脇差とは言え大切な刀ですから、土  
手の叢に置くわけにはゆかぬ。地蔵の膝に置いたのは地蔵に見張りをさせるわけですが、  
あたかも地蔵の小脇差に見える。それが可笑的い。

「川狩や夜討に…」、

夜討は頭を頭巾で包むなどして隠すわけですね。川狩もそういう意味では衣服が泥にまみ  
れてもいいように、しかも槍に替えて鉈を手にしての重装備になったのでしょう。

「川狩やふんどしの…」、

川狩も興にのってくると裸同然になるが、「ふんどし」をはずすわけにはゆかぬ。越中ふんど

しの折り返しを旗めかせているのでしょう。そこが可笑的い。

高橋 > 成る程！よく分かりました。

次の季語は「虫干」です。其角、虚子共に面白い滑稽句を詠んでいるようですよ。えっ、俳句では「糞」は「まり」と読むのですか？

夜着を着てあるいて見たり土用干 其角

虫干に虫の糞ひる佛かな 虚子

会長 > 「夜着を……」、

夜着は「かいまき」のことでしょう。「どてら」の「おばけ」みたいな布団です。それを着物のように着て歩くわけですから笑えますね。

「虫干に虫の……」、

仏は仏壇に安置されている観音菩薩様などでしょう。普段、掃除しないから虫の糞がたまる。あたかも、佛様が糞をしたように見えるわけです。佛様は気持よさそうなお顔をしているから尚更です。

高橋 > 想像豊かなご解説、なかなか面白いですね(笑)。

次の季語は「夏瘦」です。あっ！会長の句集「逃水」に、夏瘦の句を見付けましたよ。

夏瘦せを言ふ蚊のやうな声を出し 健

百九年前の滑稽句集、続けてご説明下さいね。

夏瘦をふくれ出でたる腫物かな 三川

夏瘦の腹もへりたる剩つさへ 紅緑

会長 > 「夏瘦をふくれ……」、

瘦せた体に[腫物]ですから、見た目には痛々しいですが、どこが可笑的いのでしょうか。

「夏瘦の腹も……」、

「剩つさへ」は、瘦せているのに空腹となって「ぺっしゃんこ」の体軀が笑いを誘うのですね

高橋 > 次の季語は「心太」です。

心太の原料の天草は別名を「こころぶと」とか。「ところてん」を元どおりに文字で「心太」と書くのは面白いですね。会長の句集、「怠けぐせ」の心太の句です。

**見た眼には硬そに光り心太 健**

では、百九年前の句、続けます。

**水の中へ錢やりけらし心太 太祇**

**心太さかしまに銀河三千丈 蕪村**

**紅みや醤油を抹す心太 紅緑**

**これやこの心太召す法師哉 塵外**

また、近江の話で恐縮ですが「百人一首」に、

**これやこの行くも帰るも別れては**

**知るも知らぬも逢坂の関**

という有名な歌がありますが、最後の塵外の句は、この百人一首の和歌を詠んだ「蝉丸」という法師のことを詠んだ句と書いていいのでしょうか？

会長 > 「水の中へ錢・・・」、

心太を買う人は心太の桶の中へ小錢を放り込んだのでしょうか。不衛生と言えはその通りですが、水の中へ放り込むことで、小錢の汚れは清められたと考えたのです。

「心太さかしまに・・・」、

心太の光る様子を銀河としたのでしょうか。突き出し器に落とし込むその様子が、正に銀河をさかさまにしたのと似ていますね。

「紅みや醤油を・・・」、

心太に醤油をかけると色が薄まって紅になると言う事です。「抹す」と言う事です。「抹す」と言うのは、心太が醤油の色の濃度を思いのままにしまったという事です。

「これやこの心太召す・・・」、

関所を越えるには坂を登る。喉が渇く。癒すには心太が一番。当然この法師も心太を食べていたと想像したのです。

高橋 > 次の季語は「納涼」です。詠み易い季語とみえて沢山の句が詠まれていますよ。

屋根ふきは屋根で涼みの噂哉 太祇

糞とりが来て風よこす涼哉 也有

追ひのけて犬の場をとる涼哉 也有

魚どもが桶ともしらで夕涼 一茶

下駄ころりきやらり彼奴らの夕涼 一

羽織着て夕涼むなり奥の人 紅緑

会長 > 「屋根ふきは……」、

屋根ふきは涼むために下に下りて来ることはない。恐らくは上で作業の手を休め、世の中を見下しながら、あれこれと噂に花を咲かせているのだろう、という意味ですね。

「糞とりが来て……」、

折角休んでいるのに人糞の汲み取りに来て、臭気を巻き起こすということ。迷惑千万です。

「追ひのけて……」、

犬は暑がり屋です。涼しい所を知っていて休みます。人間にとっても魅力的な涼の場所ですから、犬を追い払って涼む。人間は勝手なものです。

「魚どもが……」、

桶に入れられた魚たちは直射日光を避けて、桶の陰の部分に集まります。それを涼んでいると言ったのでしょうか。

「下駄ころり……」、

彼奴というのは、男どものことです。「ころりきやらり」というのは、いなせな姐さんの下駄の音の様で、若衆が夕涼みに行くその軟弱さを皮肉ったものです。

「羽織着て……」、

奥様ともなれば、夕涼みにもお化粧をして羽織着て出て来るのですが、庶民からすれば夕涼みくらい、もっと楽な服装で出てくれば良いのにと思うのですね。

高橋 > 面白いご解説ありがとうございました。

最後に、本日の季語を入れてのひと節を「虎造節」でお願い致します。

会長 > 夏痩せてえええ、おれど気持ちの心太てえええええ。納涼せんと水をおお呑む。呑むなら水は井戸がああええ。呑むときゃ空を見上げるがあああ。星のことなど気にはあせず。これぞ虫干しい星おおを無視～